

## ダリオ・アルジェント作品における殺人シーンの時系列的変化

矢 澤 利 弘

### Chronological change of the murder scene in Dario Argento films

Toshihiro YAZAWA

#### 1. はじめに

ダリオ・アルジェントは1940年9月生まれのイタリアの映画監督である。映画評論家を経て、セルジオ・レオーネ監督の『ウエスタン』（1968）の原案をベルナルド・ベルトルッチと共同で書いて映画界に入った。1970年の『歓びの毒牙』で映画監督デビューを飾り、その後、ほぼ一貫してサスペンス及びホラー作品を手掛けている。

ダリオ・アルジェントの映画の特徴のひとつとして、殺人シーンの華麗さがあげられる。例えば、『4匹の蠅』（1971）のラストで、殺人犯の運転する自動車トラックに激突し、フロントガラスがゆっくりと砕け散るシーン、『サスペリア PART2』（1975）におけるジョルダニ教授の殺害シーンやラストのネックレスによる殺人犯の斬首シーン、あるいは『サスペリア』（1977）において、最初の犠牲者となるパットがスタンドグラスから落下して首吊りの状態で殺されるシーンなど、華麗な殺人シーンはアルジェント作品の特徴である。

だが、後年になると、華麗な殺人シーンは次第に減少し、最近の作品からは往年の美学が失われたという意見もしばしば耳にする。

それでは、実際に、アルジェント作品における殺人描写はどのように変化していったのだろうか。本稿は、ダリオ・アルジェントのフィルモグラフィーにおいて、殺人シーンがどのように時系列的な変化をしていったのかを量的な側面と内容的な側面から明らかにすることを目的としている。

#### 2. 分析方法

この研究における分析の前提として、①殺人シーンとは具体的に何を指すのか、また、②殺人シーンとは、どの時点で始まり、どの時点で終わるのか、が明確でないため、次のような前提を置くことにする。

殺人シーンの開始について、何らかの殺人の兆候があったときを殺人シーンの開始時点とする。また、対象者が死亡し、死体の描写から次のカットに切り替わった時点で殺人シーンの終了

とする。殺人シーンには、人為的な殺人行為あるいは事故などによって、誰かが死亡するという行為がなくてはならず、単なる死体の描写だけの場合は殺人シーンに含めないものとする。また、殺されかけた対象が、実際に死亡せずに生き延びた場合も殺人シーンには含めない。

本研究で計測する殺人シーンとは、図1で示されるように、殺人の兆候から死亡までの部分で構成される部分を指すことになる。

図1



以上を前提に、殺人シーンの映像分析は以下の手順に沿って実施する。

1. 殺人シーンの定義に従って、ダリオ・アルジェント監督作品（テレビ用作品・短編を除く）から殺人シーンを抽出する。
2. 抽出したシーンの合計時間をそれぞれの映画ごとに計測する。
3. 抽出したシーンの内容を個別に分析する。

### 3. 分析結果

#### 3.1. 量的分析

ダリオ・アルジェント監督作品における殺人シーンの時間を作品ごとに集計したところ、図表1の結果を得ることができた。

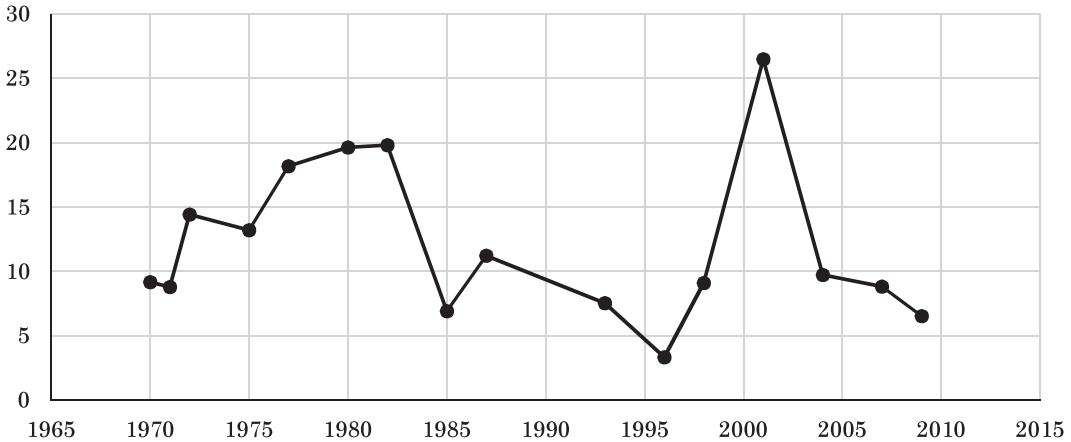
表1 ダリオ・アルジェント監督作品における殺人シーンの合計時間と構成比率

製作年度	作品名	殺人シーン (分)	全長 (分)	構成比率 (%)
1970	歎びの毒牙	9	98	9.2
1971	わたしは目撃者	10	114	8.8
1972	4匹の蠅	15	104	14.4
1975	サスペリア PART2	14	106	13.2
1977	サスペリア	18	99	18.2
1980	インフェルノ	21	107	19.6
1982	シャドー	20	101	19.8
1985	フェノミナ	8	116	6.90
1987	オペラ座／血の喝采	12	107	11.2
1993	トラウマ／鮮血の叫び	8	106	7.5
1996	スタンダード・シンドローム	4	120	3.3
1998	オペラ座の怪人	9	99	9.1
2001	スリープレス	31	117	26.5
2004	デス・サイト	10	103	9.7
2007	サスペリア・テルザ	9	102	8.8
2009	ジャーロ	6	92	6.5

出典：筆者作成

それぞれの映画の殺人シーンの合計時間を映画全体の上映時間で除することによって、殺人シーンが映画全体に占める割合を計算し、製作年度順に時系列で示せば図2のようになる。なお、横軸は製作年度、縦軸は構成比率を%で表示している。

図2 殺人シーンの構成比率の製作年別推移



殺人シーンの開始をどの地点で認識するかについては、観測者の主観的な要素が加味されていることに留意されたい。その前提のうえで、殺人シーンが最長な映画は『スリープレス』（合計時間31分、構成比率26.5%）であった。実に映画の上映時間の4分の1以上が殺人シーンに費やされていることになる。反対に、殺人シーンの合計がもっとも短い映画は『スタンダード・シンδροーム』（合計時間4分、構成比率3.3%）である。

図2を見てみると、殺人シーンの合計時間は、作品によってランダムに変化しているのではなく、製作年度の時系列で一定の傾向を持っていることが分かる。監督デビュー作の『飲びの毒牙』（1970）から『シャドー』（1982）までは、ほぼ一貫して殺人シーンの合計時間が増加している。しかし、1985年の『フェノミナ』では殺人シーンの長さが急減している。2001年の『スリープレス』は、例外的に殺人シーンの合計時間が長いものの、1985年以降の作品は総じて殺人シーンの合計時間は約10分以内、構成比率は10%以内に収まっていることが分かる。

### 3.2. 質的分析

この項では、それぞれの作品の殺人シーンについて、その内容を検討する。検討に当たっては、殺人の対象者、具体的な殺人の兆候は何か、そして殺人の方法は何か、の3つの要素に着目して分析する。

それぞれの作品から、3つの要素をまとめたものが表2である。まず、殺人の兆候について整理してみたい。印象的な殺人の兆候としては、①「部屋の灯りが消える」、②「別室で物音が聞こえる」、③「誰かが殺される客体の名前を呼ぶ」などがある。

①「部屋の灯りが消える」という殺人の兆候は、『飲びの毒牙』の5人目の犠牲者、『サスペリア PART2』の作家アマンダ、『インフェルノ』のサラとカルロ、『シャドー』のエルザ・マンニ、『スリープレス』のダンサーのメル、のそれぞれの殺人シーンの前に発生している。部屋の明か

りが消え、暗闇のなかで逃げ場をなくした対象者が殺されるというのは、ダリオ・アルジェントが多用している殺人のトリガーである。

②「別室で物音が聞こえる」もまた、ダリオ・アルジェントが好んで使用している殺人の兆候である。物音によって、誰かが家の中に侵入してきたということを暗示し、対象者は姿の見えない犯人におびえることになる。それはまた同時に、観客の恐怖感をも呼び覚ますことになるのである。『わたしは目撃者』では、ビアンカのいる部屋の近くで物音が聞こえる。カーテンが微かに動き、誰かがビアンカのアパートの部屋のなかに侵入してきたことがわかる。『4匹の蠅』のダリアも同様である。隣室から物音が聞こえ、誰かが家に侵入してきたことが示される。また、『サスペリア PART2』のジョルダーニ殺害のシーンの前にも、ジョルダーニの住まいのどこからか人の気配のする音が聞こえてくる

③「誰かが名前を呼ぶ」という殺人の兆候も、複数の作品で見ることができる。『4匹の蠅』で、メイドのアメリアに対して、不気味な声で何者かが「アメリア」と呼びかけるほか、『サスペリア PART2』でも、不気味な声がジョルダーニと呼ぶ。『インフェルノ』では、殺人シーンの前ではないものの、古文書図書館でサラが自分の名前を呼ばれて驚愕するシーンがある。

表2 ダリオ・アルジェント監督作品における殺人の兆候と殺人の方法

作品名	対象者	殺人の兆候	殺人の方法
歎きの毒牙	4番目の犠牲者	犯人が犠牲者の写真を見る。物音がする。一人称カメラが犠牲者を追う。	カミソリで斬り殺される。
	5番目の犠牲者	カメラが犠牲者を追いかけ、灯りが消える。	カミソリで斬り殺される。
	画廊の経営者ラニエリ	言い争う声が聞こえる。	窓から転落する。
わたしは目撃者	カラブレシ	一人称カメラが犠牲者を追う。	電車のホームから突き落とされ、轢死
	カメラマン	何者かが現像室に侵入する。	ロープで首を絞め殺される。
	ビアンカ	別室から物音が聞こえる。カーテンが動く。	ロープで首を絞め殺される。
	カゾーニ (犯人)	主人公アルノに捕らえられる。	エレベーターホールで転落死する。
4匹の蠅	メイドのアメリア	何者かが「アメリア」と呼ぶ。	壁の向こうで襲われる。
	劇場で死んだはずの男	一人称カメラが犠牲者を追う。	殴られ、針金で首を絞め殺される。
	探偵	不気味な音楽。周囲から人が消える。	殴られ、毒の注射を打たれる。
	ダリア	別室から物音が聞こえる。	ナイフで斬られる。
	ニーナ (犯人)	反撃されて部屋から逃げ出す。	運転する自動車がトラックに激突する。
サスペリア PART2	ヘルガ	ドアの向こうの犯人を超能力で感じる。	手斧で斬られる
	アマンダ	天井から不気味な人形が吊るされている。裏口のドアが開けられている。灯りが消える。	殴られ、風呂の熱湯で火傷
	ジョルダーニ	物音が聞こえる。何者かが「ジョルダーニ」と呼ぶ。	殴られ、机の角に歯をぶつけられ、ナイフを首に刺される。
	カルロ	トラックに接触する。	トラックに引きずられ、走ってきた自動車の轢かれる。
	カルロの母親 (犯人)	ネックレスがエレベーターに絡みつく。	ネックレスで首が切断される。

作品名	対象者	殺人の兆候	殺人の方法
サスベリア	パット及び友人	不気味な音楽が始まり、カメラが対象者を追う。	ナイフで心臓を刺され、天井のステンドグラスから落下し、首吊りの状態で死亡する。友人も落下したガラスなどで巻き添えになる。
	ダニエル	夜道を歩いていると盲導犬が何者かの気配を感じて吠える。	自分の盲導犬に噛み殺される。
	サラ	カメラが対象者を追い、何者かに追われる気配がする。	針金が絡みつき、ナイフで斬られる。
インフェルノ	サラとカルロ	黒手袋の人物が切り紙の首を切る。灯りが消える。	カルロはナイフを首に突き立てられる。サラは背中をナイフで刺される。
	ローズ	電話が切れる。何者かが部屋に侵入してくる。	ガラスで首を切断される。
	エリーゼ	血の手形痕を発見し、何者かに追われる。次々に鍵が掛けられる。	大量の猫に襲われた後、ナイフで刺される。
	カザニアン	池で転倒する。	ホットドッグ屋に包丁で首を斬られる。
	執事ジョン	何者かの気配がする。	手を掴まれ、目をえぐられる。
	管理人キャロル	ジョンの死体を見て、ローソクを落とす。	カーテンに燃え移った火を消そうとして、窓から転落死する。
シャドー	エルザ	不気味な音楽が始まり、カメラが対象者を追う。電気が消える。電話が通じない。	小説のページを口に詰め込まれ、喉をナイフで斬られる。
	チルダとマリオン	窓の格子が壊される。何者かの「墮落しきったレズめ」という声がする。	二人ともナイフで斬られて殺される。
	管理人の娘マリア	犬に追いかけられる。	腹部を斧で斬りつけられる。
	ブルマー	カメラが対象者を追う。不気味な音楽。	腹部をナイフで斬られる。
	ジューン	「殺される」とアンに電話する。	手首を斧で切断される。
フェノミナ	ベラ	勝手に小屋に入っていく。壁に付けられている鎖が外れる。	腹をハサミで刺され、首を切り落とされる。
	マクレガー博士	何者かが家に侵入し、ドアが閉まる。	槍で腹を刺される。
オペラ座／ 血の喝采	照明係	黒手袋の犯人に襲われる。	壁のフックが首に刺さる。
	ステファノ	ベティが縛られている姿を目撃する。	首から口にナイフが貫通する。
	衣装係ジュリア	ベティが縛られている姿を目撃する。	ハサミで喉を斬られる。
	ミラ	刑事が偽物ではないかという疑惑が生じる。	ドアの覗き穴から拳銃の弾丸が打ち込まれる。
トラウマ／ 鮮血の叫び	カイロプラティックの医師	(明確な兆候はない。) 黒手袋のクローズアップ。雨が降っている。	首を機械で切り落とされる。
	父ステファン	(明確な兆候はない。) 雨が降っている。	機械で首を斬られる。
	看護婦	鍵を忘れる。	ハンマーで殴られ、機械で首を斬られる。
	ロイド	何者かが電球を割る。	エレベーターで首を斬られる。
	アドリアーナ (犯人)	子供が首切りの機械を持っている。	機械で首を斬られる。
スタンダード・ シンドローム	フィレンツェで誘われた女性	一人称カメラが追う。	首を締められ、拳銃で撃たれる。
	マルコ	(明確な兆候はない。)	自動車のトランクで首を挟まれる。

作品名	対象者	殺人の兆候	殺人の方法
オペラ座の怪人	オペラ座の大工	蒸気が吹き出す。	井戸のような穴に落ちて襲われる。
	大道具係アルフレッド	(明確な兆候はない。)	尖った岩に串刺しになる。
	アルフレッドの恋人	アルフレッドの死体を見る。	舌を噛み切られる。
	オペラの教師	上記と引き続き	舌を噛み切られる。
スリープレス	アンジェラ	犯人の家から青いバッグを持ってきてしまう。	ナイフで切り刻まれる。
	アマンダ	青いファイルを持ってきてしまう。	首を締められ、ナイフで刺される。
	ダンサーのメル	電気が消える。	殴られ、溺死させられる。
	駐車場の管理人	犯人をゆする。	万年筆をこめかみに刺される。
	ドーラ	カメラが対象者を追う。「ドーラ」という呼び声が聞こえる。	殴られ、壁に顔を打ち付けられる。
	バレリーナ	(明確な兆候はない。)カメラが絨毯を写していく。	首を締められ、首を切られる。
	モレッティ	何者かが自宅に侵入する音が聞こえる。	心臓麻痺を起こす。
	ロレンゾ(犯人)	人質の首筋にナイフをあてる。	窓の外から射殺される。
デス・サイト	レモ	酒場から女性を追いかけ、ひとけのない場所へ移動する。	船上からフックで首を引っ掛けられる。
	ジョン・ブレナン刑事	一人で犯人のアジトへ向かう。	小屋に仕掛けられた罠で串刺しになる。
サスペリア・テルザ	ジゼル	不気味な声が聞こえる。	口を潰され、内臓をえぐり取られる。
	ヨハネス神父とバレリア	(明確な兆候はない。)	ヨハネスはバレリアに包丁で喉を切られ、全身を切り刻まれる。バレリアもその後、自ら包丁で喉を切って死ぬ。
	マルタとエルガ	猿や魔女の僕が部屋に侵入する。	エルガは目を潰され、マルタは槍で串刺しにされる。
ジャーロ	ケイコ	不気味なタクシーに乗車し、道が違うことに気づく。	タクシー車内で襲われる。
	セリーヌ	不気味なタクシーに乗車し、道が違うことに気づく。	顔に注射を打たれる。(厳密に言えば死亡していない)
	イエロー	刑事に追われて、高い場所へ行く。	ガラスの天井を突き破って落下する。

出典：筆者作成

#### 4. 考 察

ダリオ・アルジェント監督作品を時系列に見てみると、作品全体の長さに対する殺人シーンの長さの比率が急に低下したのは『フェノミナ』からである。それ以前の作品における殺人シーンは1割から2割程度だったが、『フェノミナ』では7%程度に減っている。

それでは、『フェノミナ』より以前の作品と、『フェノミナ』以降の作品とで、いったい何が異なっているのだろうか。主人公の役割と物語構成という2つの視点から考えてみたい。

まず、『フェノミナ』以降の作品には、主人公の行動が物語の進行を牽引する機能を果たすという傾向がみられる。それ以前の映画の主人公たちは、どちらかといえば、物語を推進していくというよりも、個々のエピソードをつなぐ接着剤のような役割である。それぞれの映画の主人公

が殺人事件の捜査を進めていくなか、犯人は主人公の行動に先回りして、証拠隠滅殺人を重ねていく。『サスペリア』、『インフェルノ』に至っては、魔女が人々を殺めていく場面をつなぐ狂言回し的な存在となっている部分も多い。

『フェノミナ』で、主人公ジェニファー・コルビノを演じる女優ジェニファー・コネリーは、アルジェント作品のなかでは特に女優としてのキャラクターが際立っている。『フェノミナ』では、主人公ジェニファーが、狂言回しではなく、まさしく「主人公」として機能しているのである。映画全体に占めるジェニファーの出演部分が多く、逆に、ジェニファー以外の人物の行動はあまり描かれない。

『フェノミナ』のジェニファーで見られたような、主人公中心の物語構成は、ダリオ・アルジェントの娘である女優アーシア・アルジェントが主人公を演じるようになってから、さらに顕著になっている。

『スタンダード・シンドローム』では、主人公の警察官アンナは、レイプ犯人のアルフレードに、一貫してつけ狙われる。だが、アンナは殺されてしまうわけではなく、レイプの対象としてのみ存在する。アンナはレイプされたあとは生き延びるため、この映画には殺人のシーン自体は多くない。同様に、アーシア・アルジェントが主演を務める『サスペリア・テルザ』でも、主人公サラを主軸として物語が進むため、延々と結果を引っ張るような演出をしている殺人シーンは少ない。

監督デビュー作『歓びの毒牙』から『シャドー』までは、ほぼ一貫して殺人シーンが増加している。観客はアルジェントの作品に対して、華やかな殺人シーンを希望しているということを実感していたからという面もある。ただ、印象的で力強い殺人シーンをいくつか繋いでいくという手法を採用した場合、ストーリーを貫く縦の線が弱くなる。これが、アルジェントの映画には論理性が希薄であると批判される原因の一つとなっている。逆に、主人公の行動を中心とした作劇をする場合、複数の殺人シーンを団子状の構造で繋いでいくという構造は取りにくい。ここにジレンマが生じるのである。

## 5. おわりに

本稿においては、ダリオ・アルジェントの監督作品を対象に殺人シーンの特徴を分析した。その結果、ダリオ・アルジェントが作品で描く殺人の兆候には主として3つパターンがあることが分かった。また、殺人シーンの長さや映画全体を貫く物語構造との関わりについての仮説を導出することができた。

本研究の課題としては、以下の点があげられる。本研究はダリオ・アルジェント作品のみを対象としており、同時代の他の映像作家との比較分析をしていない。そのため、本研究で得られた結果が、作家の個人的な思考の変化に基づくものであるのか、それとも時代や社会的な情勢から生じたものであるのかについては明らかにすることができなかった。今後は、他の作家との相対的な比較研究を行い、本研究の精緻化を行いたい。